

いかげぬ佐伯史談会員の参詣に、惟治の靈も喜んだことであらう。

之で私の目的は一応達成したのであるが、三会員ともまだ尾高知廟に行っていないとのことなので、廟をめざして車を進める。佛越から左折して、歌糸、イヤザメを過ぎ、古江境の峠に達する。去る九月二十日の探訪に、雨のために行けなかつたコースをたどることにする。古江側と三川内側の分水嶺に沿って大體北行することになる。古江、島の南を眼下に、日向灘を遠望する眺めはなかなかのものである。

道は文字通りの山径で通る人も少ないのであらう。時々とだえたりするが、草野で見通しがよいので迷うことはない。進む程に蘆海も深島が視界に入つて眼を楽しませる。イヤザメで、赤い馬居に達すれば尾高知廟は近いと聞いて来たが、山径は上つたり下つたりを繰返して、馬居はなかなか視界に入らない。しかし急ぐこともない。右手の海景色や、左手の三川内の山々を眺めながら、右手の歩を進める。うららかな小春日和に、汗ばんだ傾小丘の腰をめぐると、忽然として前方に馬居があるわれる。

馬居は分水嶺上にあつた。左手に谷沿いに下ること三町余りて尾高知廟に到達する。私は四十二年の八月に、古藤田さんとイヤザメから参詣して、再来期し難いと苦残り惜しんだのであつたが、再び訪れて感無量であつた。他の三氏もそれぞれ悲運の柵竿礼城主惟治を思つて感慨にふけられたことであらう。

廟を辞して引返して馬居に達し、眺望絶佳の一劃に腰をおろして、したためた晝食の味は又格別であつた。

かくて古江峠に引返したわけであるが、峠から尾高知への道は思ひの外遠かつた。一里ばかりありそうであ

ある。

峠と下つて佛越から左折して葛葉に出で、国道十号線と走つて帰着したのは午後三時半、惟治の足跡を尋ねた旅を終えて、快い疲れと滋茶の一服でいやした。

今回の探訪で痛感したことは、北浦村当局が尾高知廟の文化財としての価値を今少し高く評価して、イヤザメから尾高知に入る入口、峠から山径に入る所、馬居から下る所等に案内板を立てたらということであつた。一つには惟治を顕彰し、二つには村の観光開発に多大な利益をもたらし、三つには訪れる人を迷うことなく廟に導くであらうと思つたのである。

〔余白寸言〕

歴史は夜つくられる」という言葉がある。私は、私たちが身のまわりで、今、次々につくられていくと言いたい。記録して残したい。 編集子

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

佐伯豊南高等学校教諭
同校郷土部クラブ顧問

本会 会員 市野 瀬

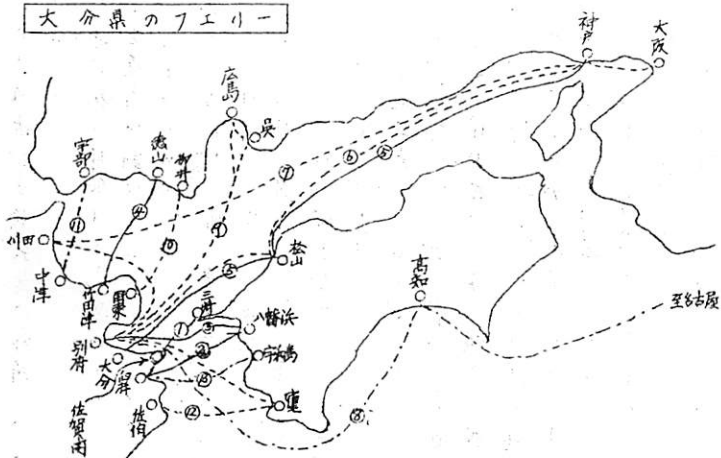
仁

第二章 佐 伯 港 (つづき)

五、海上輸送の特色及び問題点と佐伯港

(二) 佐伯港

大分県のフェリー



- ① 九四国道フェリー
- ② 九四フェリー
- ③ 九四高速フェリー
- ④ 周防灘フェリー
- ⑤ ダイヤモンドフェリー
- ⑥ 九四阪神フェリー
- ⑦ 西日本観光汽船
- ⑧ 石古屋敷界
- ⑨ 宇和島運輸汽船
- ⑩ 防予汽船
- ⑪ 底兒島汽船
- ⑫ 宿毛観光汽船
- ⑬ 盛運汽船

(5.25.2.6 大分合同新聞による)

佐伯港が多彩な顔を持つと云われる要因は、リヤス式海岸の彎曲した地形に、古くからおつた漁船や連絡船と海上自衛船、セメント輸送船、木材運送船、新造船等の出入する港であつて、高工業のため以外に、地方的特色をもつ連絡船や地理的特色とも言える軍港色をもつた港だからだである。それに、宿毛-佐伯間のフェリーが入航するとなるとまた新しい表情がでてくることにな

中でも何を中心として大港であるか、海軍官庁や市役所の資料を根拠にするのもよいが、妙見さんの頂上に立つて観察すると、楽しくもやり、大抵はつかぬるものと

佐伯與國運送取締役矢野力氏は佐伯港の特色を、外航船の入港する港と称して、暴風の他港とハッキリ区別している。事実昭和四十四年度の統計によると、外航船二四六隻、内航船二〇三六隻、外航船総トン数一〇、二八、八〇トン、内航船一、六八〇、〇五〇トンとなつており、外航船の荷種は木材であるから、佐伯港が木材輸入港と呼び

その港の機能を十分に働かせるための港施設整備も、木材輸入の受入体制と基軸として計画が実施されるものと、事実日本セメント、造船所を除く、二千、興人、それに地場産業の木材業者が、又なこれに関與している。

二平合放の社長村上博之氏は「佐伯港施設は零に等しい、軍艦は沖合に碇泊し、接岸しないから岸壁を造らなかつたのだ」と云う。施設が零に等しいとか、日本一不備だとかの悪評はよく聞いておるし、私エの紙面で取上げたこともおる。しかし考えようによつては、大きく飛躍せんとする佐伯にとつては、むしろ零から出発する方が好都合でもある。

完全に荒廢した灰墟の中から、現在の日本やドイツがあるように、国政では、名古屋や大分市のような近代都市が生まれかかつてゐる如く、思いきつた計画が樹てられるからである。

かねてより佐伯港運社長木原義夫氏から、常陸県の港湾行政の行きとどいてゐる話とよく聞いていた。とくに

細島本港專用港を見ることをすゝめられたので、今夏休みの八月三十一日、單身で見学をこころみられた。

新産都の指定を受けた、日向延岡地区工業地帯の建設は、駅より車で十五分ばかり広い用地の中を走りける。開発局の係官から詳しく説明をきいた後、展望台より遠望すると、工業港の大体の規模は分る。海岸に出で陸面を岸壁に巨船が数隻、静かにつながれてゐるのを見ながら、長く長くコンクリートの上を歩き続けた。来春三月に就航する予定の、川崎―日向間のカーブエリーの着着場も建設の真最中である。陸附近の裏道とも言うべき所を三、四十分、雨の中を徒つて、舗装道路が右側にカーブすると、眼前に青い海面が展開した。これが細島港だ。極端に中のせまい入江である。左岸に区劃して積まれた千ツポの山が二〇〇米ばかりつづく。ここが三号の物揚場である。積込中の船は五〇トン級の小型船で作業員も少い。約三〇〇米の海とはさんな対岸の岸壁が一直接に見渡され、倉庫らしき建物が背後に並ぶ。細島港の引込船の艇もその附近にある。一、二〇〇米の距離に、二、三号の岸壁があり、五〇〇トン級の船を深べることができ、岸壁には船の接岸保護のためのゴム板（自動車のようなタイヤに似たもの）が斜に張りつけてあり、長く続き整然とした感じだ。一隻の船も浮かんでいない。月曜日の午後三時頃であった。

雨上りに魚釣りの姿がちらほら見えて、のどかな南国の港風景である。港の一番奥まった道路に立つてみると、右岸の山腹にならぶ家々の屋根が色とりどりで都会船だ。枝ぶりのよい松と調和をとり、海面に映えている。上空には虹が大きく半円を描いていた。

港を抱く米山は今、道路建設中とかで、赤い肌へ道が

うねっている。米山は下九・七米、リヤス式海岸にない奈良の山を思わせる、ゆるやかなスロープを持つてつこい山だ。この頂上から眼下の細島商業港や北方の工業港、それに広大な工業用地として待つ空間を通して、日向市の中央をみてかくかに見える九州山脈を眺める景色は、すばらしいものだそうと想像した。少くとも今からの港開港は、美観を失つては時代遅れだと思ふ。

宮崎県下の森林資源を背景に築いた細島港の後背地は、すべて木材工業地特有の騒音と臭気がたたまつていながら、かつたりとした感じだ。野積場、建物、設備、道路も、まだまだ大型化や近代化を要求する時が来るかも知れないが、それ以前の時に解決すればよいだろう。

佐伯の地は木材産業港と云つても、狭い地域に各種工業や諸施設の間に遠慮がちに重量のある外材を海面から陸揚げをし野積しているので地割が問題となる。その上大部分が外材が主で、他港に積出す仲継地と云う性格であれば、なおさら細島港と違った施策が必要となつてくる。佐伯は佐伯で重要港湾にふさわしい港湾施設をいなくてはならない。

この度実施された大分県の国勢調査結果を見ても、十市の中大分市、別府市を除いて、県下で一番人口減少しないのが佐伯市である。（参考までに、県下の町村で人口減が一番少ないのが弥生町で、日出町だけが増である。）昔も今も変わらず活況している佐伯はよい所です。と二平の村上社長が話されていながら、人や物資の流れはたしかに流動的である。一般に都市や街の玄関口駅が代表とされよう。その点佐伯駅前建物の建物や道路や車、人の賑わいを見るにつけ、白桦や津久見に比較して格段の差のあることに気がつく。若し佐伯港湾施設の完備が成つた場

令、佐伯市は一段の飛躍を見るものと思われる。

港湾における輸送機能の円滑は、陸上運輸、とくに道路整備の良否に直接関連をもつ。この点リヤス式海岸地域特有の狭い後背地をもつ佐伯地区は、道路網が大きな難点である。事実、駅前を通る中央通り、幹線道路、長島道路、今計画されている女島の道路は、大手前集り一本となる。西谷から二本に分れて再び全橋橋附近で一本となり、日豊線としばらく並ぶ。

やはり右は太分、左は宮崎に行く国道十号線が延び、その沿線にかぎりない後背地を持つのが佐伯市南郡の地形だ。これが左の港の工場に通勤する多数の労働力を持ち、佐伯駅前の賑わいをそっくり出し、大手前交叉点の都会を及ぶラッシュと排気ガスの密度を濃くしているわけだ。

国道二一七号線は、上浦地区から山越えをして津久見臼杵に向って舗装も完成された。が佐伯の経済圏はこの方向に伸びることはむづかしい。反対に大分市方面からの経済交流の波も、この山越えは大きな障害である。佐伯市の経済圏の指向は、東方の海と左右に分れる国道十号線に向って伸び、県南の独立した経済圏を形成するのではなからうか。県下で人口減の数が最も低いのは、佐伯市と弥生所であることは最も興味のあることである。

このような地理的環境を考慮に入れて将来を展望すると、広域行政地区指定の意味も読みとることができよう。

佐伯市の表玄関と云われる港がどんな性格をもつてあるかは、単に海から入ってくる物資だけでなく、後背地から佐伯市に入ってくる物資を見る必要がある。

豊南高校御土誌クラブ員は、学校の前の道路へ国道二

一七号線バイパスを上下する輸送物資を調査して見た。それによつてもセメント、木材関係の原料や半成品が多く、陸上輸送機関の大型化はうかがえて、危険度や土地の狭さを上げがざるを得ない。

国道217号線のトラック台数

種別 月・日	木材		チップ		石油		生コン		セメント		砂		水産		鉄	
	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下
4.14(水)		2		1	3	2	3		3		2					
15(木)		4	1		1	2	2		1							
16(木)			2			1	2		1		2		2			
17(金)	1		2		1			1	4		3			1	1	
22(水)	1	1	1		5	5	1	1	1					1	1	1
5.11(月)	4				1	2			1		5		1			
12(水)	2					2			2		2					
計	8	7	6	0	8	5	10	3	9	7	4	4	12	2	3	2
上下計	15		6		13		13		16		8		14		5	3
合計	34				13				38				5			

調査場所 豊南高校前バイパス
 調査時刻 毎日午後4時10分～4時30分
 区別 上 佐伯市中心部へ
 下 弥生所方面へ 国道10号線へ
 調査 豊南高校御土誌クラブ員

しかし反面次のようなことば云えないだろうか。

大分県下の川のうちでも、気分屋で少し乱暴者の奮正川は、女島、長島の周辺に長年にわたって土砂を堆積して、(臼杵市)のような台地もなく、津久見市と大差のない街ではなからうか。現在最も必要とする土地を形成してくれている。万一デルタがなかつたら、佐伯市はどのどのスペースを持つておらうか。こうした自然の恵みに対して、下流の流れをカットしなりの下水処理で悪臭を

故つ川にしては、番匠川は何の抵抗も示さず黙して語らない。そればかりか、長島川や中江川の主流では、外れの時水場になつたやうな、台風時の船舶の避難場所として使用され、なすてはならぬ存在であるではないか。

私目、今後の佐伯市発展の功労者は、この番匠川を一番に推荐したいと思ふのであるが、いかか否かであるか。秋の文化勲章等の叙勲の項になるとこんなことを思う。今後デルタ地帯に工場地帯を造るなり、住宅地にするなり、道路を敷いても番匠川自身も拵々ほしなないであらう。が川自身の本心といふか、自然の姿が何んであるかを謙虚に見きわめて、工事としないかへごんを形か分らないか。大自然の鉄槌が下ると云うことは知つておかぬはならない。

第二章佐伯港を少し長らしく書き続けまして私目、こゝで結ぶの言葉を書いて、しばらく休息したいと思ふ。佐伯港の働きを十分に發揮するにためは、港灣施設の近代化と道路網整備の一言につきるであらう。ただその際、束まれた港灣の自然的條件と後背地の山野を育みながら貫流している番匠川の爲してきた働きを理解し、感謝して、しかる後に人の世の住みよき地域はどんな所かを工夫をこらすすが、生きていく私達の努であらうかと思ふ。

(この項終り)

研修記

三重町に文化財を学ぶ

弥生町文化財調査委員
本会委員 伊 賀 重 雄

十一月六日、七日、県教育委員会主催「文化財指導者研修会が三重町で開催され、私達も出席したので会員の

皆様にその状況と報告致し度いと思ひます。

第一日は別府大宮自井先生の、金石文の比較研究のお話があり、数十枚の大型写真による説明と、石塔の分類等々、塔碑研究には缺かせない貴重なお話でした。ついで元辨薬師学校に入江先生の民俗資料についてのお話があり、宇城宮より出土した一般庶民のもの、宮廷のものよりお話が民俗資料の定義、考古学との関連性、収集について心得等、歴史学としては一審新しい学問であるから、これからが大事であるとお話。

午後四時すぎ両先生のお話がすま、三重町教育委員会による「三重町の文化財」をスライドにより公民会主事の説明で紹介していただいたが、注目したいのは古墳の多いことと、出土した器物が完全に保存されていることである。

三重町宇佐、国東につづいて文化財の多い地、ここに生を享け、三重の風土の中に立派に成長された旧知の中に、二人の故人土生米作先生、伊藤昌人先生を挙げたい。私は特に本会員の中で両先生に対し面識の深い所で、さしぬる八月伊藤先生が遊かれ、一か月経たぬ内に土生先生がみまかり、私の胸の中には大きな空洞が生じて仕舞つた。両先生と初めてお会いしたのは七年前、所研修会が宇佐神宮で開催された時、たまたま同室で両先生の御人格の立派さに打たれ、それより御交際をお禮として今日まで文通をつづけて来たおかげで、三重町の第一級の人を失つた感じが一パイです。三重町の文化、文化財を語るには、このお二人を除外しては意味がないと極言してまいと思ひます。茲につづいて両先生の御冥福をお祈り致し度いと思ひます。

スライド映写がすま、宿舎の三國屋旅館で夕食をいただき、夜は商工会青年部の演じる三重神楽を見学して、